

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第34回 みたままつりに想う

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

今年もまた、東京に暑い夏が訪れました。78年前の昭和20（1945）年8月15日正午、日本国民はラジオから流れる玉音放送（天皇の声による放送）を聞き、長く続いた戦争が終わったことを知り、真夏の強い陽射しの中、地面にひれ伏して涙にむせびました。国民が初めて昭和天皇（現在の天皇の祖父）の声を聞き、「神国」と言われてきた大日本帝国（戦前の日本国の正式名称）の臣民（国民のことをそう呼んでいました）が、有史以来ともいわれる敗戦を受け入れた瞬間でした。

筆者自身は戦後生まれですので、その光景は自分では見ていません。しかし、夏になると否応なしに思い浮かべます。日本国民にとって、初めての屈辱であり、戦後の新生日本の出発点だったからです。民族の鮮烈な記憶として国民の脳裏に焼き付いています。

戦争で亡くなった戦没国民の英霊は、東京・九段の靖國神社に祀られていることは、今年のこのコラムでも触れました。その靖國神社では、毎年春と秋に催される例大祭で、慶応4（1868）年の旧徳川幕府軍と明治新政府軍が戦った戊辰戦争以来の全戦没者の御霊をお慰めしています。1940年代の大東亜戦争（第2次世界大戦）の戦没者だけではないのです。そして、日本国民が先祖の霊を祀る「お盆」の期間にあたる7月13～16日に、靖國神社では毎年、「みたままつり」が行われ、境内は4日間にわたり、老若男女で埋め尽くされます。新型コロナウイルス感染症拡大で、2年間にわたり一般の人が参加しての開催が見送られましたが、昨年制限付きで復活し、今年はほぼ従来通りの規模で「第76回」として行われることになりました。

今年6月下旬に同神社を参拝したとき、広い境内には既に所狭しと提灯や灯笼を吊るす枠組みが設置され、祭りの準備が着々と進んでいました。

お盆は年に1度、祖先の霊をお迎えし、お送りする行事で、日本古来の祖先を信仰する習慣と、仏教、神道が融合した国民的行事です。全国の多くの地域では旧暦（太陰暦）に合わせ、8月に行

われています。そのため、夏休み中のその時期には、出身地の実家などに帰ろうとする「民族の大移動」が起き、新幹線、航空機、高速道路が大混雑しますが、東京を中心とした関東地方の各家庭では、新暦（太陽暦）の7月のこの時期にお祀りする習慣が定着しています。靖国神社も東京の習慣に合わせてこの時期に御霊みたまをお慰めするわけです。

境内では、外苑参道沿いに1万個の大型提灯、内苑に2万個の小型提灯が献灯みあかし（提灯を奉納して飾ること）として計3万個の提灯が掲出され、光の祭典が繰り広げられます。連日、神輿みこし曳き回し、青森ねぶた、阿波踊りあわおど、江戸芸能かっぽれ、吹奏楽団などのパレードが練り歩き、盆踊り大会やキッチンカーの出店も予定されています。かつては露天も多数出店されていましたが、最近は一部の風紀の乱れやコロナ禍の影響で見送られています。それでも、連日、老若男女であふれかえります。筆者が昨年見事だと思ったのは、浴衣を身にまとった若いカップルなどが神社を訪れるため、近くにある地下鉄九段下駅やJR市ヶ谷駅から列をなして歩いている事、そして、買い食いをしていた彼らが、本殿前には食べ物などを持ち込まず、本殿前や鳥居の下では、神道の作法にのっとり、頭こうべを垂れ、英霊に礼を尽くしていることです。

そうした中で、能楽堂では毎夕、各種奉納芸能が上演されます。筆者はここ十数年、コロナ禍で奉納芸能が中止された年以外は毎年、「奉納演奏合唱団・国民歌劇団有志」の一員として、日本唱歌を奉納演奏しています。

「靖国神社の歌」に始まり、国民唱歌や軍歌、軍国歌謡、そして最後には「東京ラブソディー」を聴衆の皆さんと大合唱するまで、約1時間、16曲に亘る舞台です。今年是最終日の16日日曜日午後6時半からの上演です。

今年が目玉の楽曲は「抜刀隊ぼつとうたい」です。明治10（1877）年、薩摩藩さつまはん（現在の鹿児島県）の下級武士から政治家になった西郷隆盛さいごうたかもりが率いた反乱軍が起こした西南戦争の際に、鎮圧に向かった政府軍の軍人や警察官が歌った歌だと言われています。敵の大將（西郷）やその部下を尊敬しながら、果敢に戦うその姿勢はまさに武士の心「武士道」そのものだと言われています。行進曲調のメロディで、今でも陸上自衛隊や警察の部隊の分列行進などの時に演奏されています。

また、「婦人従軍歌」は軍歌ではなく、明治27（1894）年に日本と清国しんこく（中国の当時の王朝）が戦った日清戦争の際、戦地に赴おもむき、銃弾飛び交う中、戦闘で負傷した兵士たちを看護する尊い姿を歌ったものです。東京・新橋の駅頭から従軍看護婦の皆さんが出発する光景から生まれた歌だと言われています。

新型コロナウイルス禍に世界中が覆われていた昨年 2 月にウクライナに対するロシアの侵略が始まってから、500 日余りの月日が流れました。現地からの報道では、ウクライナ国民の 8 割以上が家族や友人がこの戦争で亡くなったり、負傷したりしたという経験を持っているそうです。そして、壊滅的な被害を受けた東部や南部の激戦地だけでなく、首都キーウ（キエフ）を含む全国の市街地が空襲の被害に遭っている光景が毎日のようにニュースとして飛び込んできます。そして、この光景は、78 年前の東京、広島、長崎をはじめとした日本各地の都市に重なっています。

^{ひるがえ}翻って現在の日本周辺地域を見渡せば、ウクライナを侵略するロシアは、先の大戦の終戦後 78 年間不法占拠している日本固有の領土である北方領土（^{くなしりとう}国後島、^{まどろふとう}択捉島、^{しこたんとう}色丹島、^{ほぼまいしとう}歯舞諸島）の返還に応じないどころか、同地域での軍事演習を活発化させています。北朝鮮はひっきりなしにミサイルを日本海に撃ち、日本列島を飛び越した太平洋や日本の排他的経済水域（EEZ）内にも着弾を繰り返しています。中国は、これも日本の固有の領土である^{せんかくしよとう}尖閣諸島（沖縄県石垣市）周辺の接続水域に連日公船を展開し、領海侵入を繰り返しています。最高指導者の^{しゅうきんべい}習 近平中国共産党主席は、武力による台湾併合を否定していません。実際にそれが起きれば、沖縄県の島々が戦場になる可能性が高まっています。

こうした厳しい国際環境の中で迎える今年のお盆、そしてみたままつりでは、この国の^{いしづえ}礎となった英霊に思いをいたし、未来の日本社会の平和を維持することを国民の 1 人として誓いたいと思います。